A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

# 日本の文学

14

夏目漱石(三)

中央公論社

日本の文学　14　©1966

夏目漱石(三)

昭和41年8月25日初版印刷
昭和41年9月5日初版発行　価390円

発行者　宮本信太郎

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　中央精版印刷株式会社製本部

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

大正元年 9 月撮影

「明　暗」　津田青楓画

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

# 目次

道草　5
明暗　170
注解　526
解説　中野好夫　538
口絵「明暗」　津田青楓
挿画　津田青楓

# 夏目漱石

(三)

# 道草

## 一

健三が遠い所から帰って来て駒込の奥に世帯を持ったのは東京を出てから何年目になるだろう。彼は故郷の土を踏む珍らしさのうちに一種の淋しみさえ感じた。

彼の身体には新らしくあとに見捨てた遠い国の臭いがまだ付着していた。彼はそれを忌んだ。一日も早くその臭いを振るい落さなければならないと思った。そうしてその臭いのうちにひそんでいる彼の誇りと満足にはかえって気が付かなかった。

彼はこうした気分をもった人にありがちな落ちつきのない態度で、千駄木から追分へ出る通りを日に二へんずつ規則のように往来した。

ある日小雨が降った。その時彼は外套も雨具も着けずに、ただ傘をさしただけで、いつもの通りを本郷の方へ例刻に歩いて行った。すると車屋の少しさきで思いがけない人にはたりと出会った。その人は根津権現の裏門の坂を上がって、彼と反対に北へ向いて歩いて来たものと見えて、健三が行く手を何気なく眺めた時、十間ぐらい先からすでに彼の視線にはいったのである。そうして思わず彼の眼をわきへそらさせたのである。

彼は知らん顔をしてその人の傍を通り抜けようとした。けれども彼にはもう一遍この男の眼鼻立ちを確かめる必要があった。それでお互いが二三間の距離に近づいたころまた眸をその人の方角に向けた。すると先方ではもう疾くに彼の姿をじっと見つめていた。

往来は静かであった。二人の間にはただ細い雨の糸が絶え間なく落ちているだけなので、お互いがお互いの顔を認めるには何の困難もなかった。健三はすぐ眼をそらしてまた真正面を向いたまま歩き出した。けれども相手は道端に立ち留まったなり、少しも足を運ぶ気色なく、じっと彼の通り過ぎるのを見送っていた。健三はその男の顔が彼の歩調につれて、少しずつ動いて回るのに気がついたくらいであった。

彼はこの男に何年会わなかったろう。彼がこの男と縁を切ったのは、彼がまだ二十歳になるかならない昔のことであった。それから今日までに十五六年の月日がたっているが、その間彼らはついぞ一度も顔を合わせたことがなかったのである。

彼の位地も境遇もその時分から見るとまるで変っていた。黒い髭を生やして山高帽をかぶった今の姿と坊主頭の昔の面影とを比べて見ると、自分でさえ隔世の感が起らないとも限らなかった。しかしそれにしては相手の方があまりに変らな過ぎた。彼はどう勘定しても六十五六であるべきはずのその人の髪の毛が、なぜ今でも元の通り黒いのだろうと思って、心のうちで怪しんだ。帽子なしで外出する昔ながらの癖を今でも押し通しているその人の特色も、彼には異な気分を与える媒介となった。

彼はもとよりその人に出会うことを好まなかった。万一出会ってもその人が自分より立派な服装でもしていてくれればいいと思っていた。しかし今目のあたり見たその人は、あまり裕福な境遇にいるとは誰が見ても決して思えなかった。帽子をかぶらないのは当人の自由としても、羽織なり着物なりについて判断したところ、どうしても中流以下の活計を営んでいる町家の年寄りとしか受け取れなかった。彼はその人のさしていた洋傘が、重そうな毛繻子であったことにまで気が付いていた。

その日彼は家へ帰っても途中で会った男のことを忘れ得なかった。おりおりは道端へ立ち止まってじっと彼を見送っていたその人の眼付きに悩まされた。しかし細君には何にも打ち明けなかった。機嫌のよくない時は、いくら話したいことがあっても、細君に話さないのが彼の癖であった。細君も黙っている夫に対しては、用事のほか決して口を利かない女であった。

## 二

次の日健三はまた同じ時刻に同じ所を通った。その次の日も通った。けれども帽子をかぶらない男はもうどこからも出て来なかった。彼は器械のようにまた義務のようにいつもの道を往ったり来たりした。

こうした無事の日が五日続いたあと、六日目の朝になって帽子をかぶらない男は突然また根津権現の坂の蔭から現われて健三を脅やかした。それがこの前とほぼ同じ場所で、時間もほとんどこの前と違わなかった。

その時健三は相手の自分に近付くのを意識しつつ、いつもの通り器械のようにまた義務のように歩こうとした。けれども先方の態度は正反対であった。何人をも不安にしなければやまないほどな注意を双眼に集めて彼を凝視した。隙さえあれば彼に近付こうとするその人の心がどんよりした眸のうちにありありと読まれた。出来るだけ容赦なくその傍を通り抜けた健三の胸には変な予覚が起った。

「とてもこれだけでは済むまい」

しかしその日家へ帰った時も、彼はついに帽子をかぶらない男のことを細君に話さずにしまった。



试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

彼と細君と結婚したのは今から七八年前で、もうその時分にはこの男との関係がとくの昔に切れていたし、その上結婚地が故郷の東京でなかったので、細君の方ではじかにその人を知るはずがなかった。しかし噂としてだけならあるいは健三自身の口からすでに話していたかも知れず、また彼の親類のものから聞いて知っていないとも限らなかった。それはいずれにしても健三にとって問題にはならなかった。

ただこの事件に関して今でも時々彼の胸に浮かんでくる結婚後の事実が一つあった。五六年前彼がまだ地方にいるころ、ある日女文字で書いた厚い封書が突然彼の勤め先の机の上へ置かれた。その時彼は変な顔をしてその手紙を読んだ。しかしいくら読んでも読んでも読み切れなかった。半紙二十枚ばかりへ隙間なく細字で書いたものの、五分の一ほど眼を通したあと、彼はついにそれを細君の手に渡してしまった。

その時の彼には自分宛でこんな長い手紙をかいた女の素性を細君に説明する必要があった。それからその女に関連して、ぜひともこの帽子をかぶらない男を引合いに出す必要もあった。健三はそうした必要にせまられた過去の自分を記憶している。しかし機嫌買いな彼がどのくらい綿密な程度で細君に説明してやったか、その点になると彼はもう忘れていた。細君は女のことだからまたはっきり覚えているだろうが、今の彼にはそんなことを改めて彼女に問い訊して見る気も起らなかった。彼はこの長い手紙を書いた女と、この帽子をかぶらない男とをいっしょに並べて考えるのが大嫌いだった。それは彼の不幸な過去を遠くから呼び起す媒介となるからであった。

幸い彼の目下の状態はそんなことに屈托している余裕を彼に与えなかった。彼は家へ帰って衣服を着換えると、すぐ自分の書斎へはいった。彼は始終その六畳敷の狭い畳の上に自分のすることが山のように積んであるような気持でいるのである。けれども実際からいうと、仕事をするよりも、しなければならないという刺激の方が、はるかに強く彼を支配していた。自然彼はいらいらしなければならなかった。

彼が遠い所から持って来た書物の箱をこの六畳の中であけた時、彼は山のような洋書のうちに胡坐をかいて、一週間も二週間も暮らしていた。そうして何でも手に触れるものを片はしから取り上げては二三頁ずつ読んだ。それがため肝心の書斎の整理はいつまでたっても片付かなかった。しまいにこの体たらくを見るに見かねたある友人が来て、順序にも冊数にも頓着なく、あるだけの書物をさっさと書棚の上に並べてしまった。彼を知っている多数の人は彼を神経衰弱だと評した。彼自身はそれを

自分の性質だと信じていた。

三

健三は実際その日その日の仕事に追われていた。家へ帰ってからも気楽に使える時間は少しもなかった。その上彼は自分の読みたいものを読んだり、書きたいことを書いたり、考えたい問題を考えたりしたかった。それで彼の心はほとんど余裕というものを知らなかった。彼は始終机の前にこびり着いていた。

娯楽の場所へも滅多に足を踏み込めないくらいいそがしがっている彼が、ある時友達から謡の稽古を勧められて、体よくそれを断わったが、彼は心のうちで、ひとにはどうしてそんな暇があるのだろうと驚ろいた。そうして自分の時間に対する態度が、あたかも守銭奴のそれに似かよっていることには、まるで気がつかなかった。

自然の勢い彼は社交を避けなければならなかった。人間をも避けなければならなかった。彼の頭と活字との交渉が複雑になればなるほど、人としての彼は孤独に陥らなければならなかった。彼はおぼろげにその淋しさを感ずる場合さえあった。けれども一方ではまた心の底に異様の熱塊があるという自信を持っていた。だから索寞たる曠野の方角へ向けて生活の路を歩いて行きながら、それがかえって本来だとばかり心得ていた。温かい人間の血を枯らしに行くのだとは決して思わなかった。

彼は親類から変人扱いにされていた。しかしそれは彼に取って大した苦痛にもならなかった。

「教育が違うんだから仕方がない」

彼の腹の中には常にこういう答弁があった。

「やっぱり手前味噌よ」

これはいつでも細君の解釈であった。

気の毒なことに健三はこうした細君の批評を超越することが出来なかった。そう言われるたびに気まずい顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心からいまいましく思った。ある時は叱り付けた。またある時は頭ごなしにやり込めた。すると彼の癇癪が細君の耳に空威張りをする人の言葉のように響いた。細君は「手前味噌」の四字を「大風呂敷」の四字に訂正するに過ぎなかった。

彼には一人の腹違いの姉と一人の兄があるぎりであった。親類といったところでこの二軒よりほかに持たない彼は、不幸にしてその二軒ともあまり親しく往き来をしていなかった。自分の姉や兄と疎遠になるという変な事実は、彼に取ってもあまり気持のいいものではなかった。しかし親類づきあいよりも自分の仕事の方が彼には大事に見えた。それから東京へ帰って以後すでに三四回彼らと顔を合わせたという記憶も、彼には多少の言いわ

# 艸道

けになった。もし帽子をかぶらない男が突然彼の行く手を遮らなかったなら、彼はいつもの通り千駄木の町を毎日二へん規則正しく往来するだけで、当分ほかの方角へは足を向けずにしまったろう。もしその間に身体の楽に出来る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切った四肢を畳の上に横たえて半日の安息を貪るに過ぎなかったろう。

しかし次の日曜が来た時、彼はふと途中で二度会った男のことを思い出した。そうして急に思い立ったように姉のうちへ出かけた。姉のうちは四ツ谷の津の守坂の横で、大通りから一町ばかり奥へ引っ込んだ所にあった。彼女の夫というのは健三の従兄にあたる男だから、つまり姉にも従兄であった。しかし年齢は同い年か一つ違いで、健三から見ると双方とも、一廻りも上であった。この夫がもと四ツ谷の区役所へ勤めた縁故で、彼がそこをやめた今日でも、まだ馴染みの多い土地を離れるのがいやだといって、姉は今の勤め先に不便なのも構わず、やっぱり元の古ぼけた家に住んでいるのである。

## 四

この姉は喘息持ちであった。年が年中ぜえぜえいっていた。それでも生まれ付きが非常な癇性なので、よほど苦しくないと決してじっとしていなかった。何か用をこしらえて狭い家の中を始終ぐるぐる廻って歩かないと承知しなかった。その落ちつきのないがさつな態度が健三の眼にはいかにも気の毒に見えた。

姉はまた非常にしゃべることの好きな女であった。そうしてそのしゃべり方に少しも品位というものがなかった。彼女と対坐する健三はきっと苦い顔をして黙らなければならなかった。

「これがおれの姉なんだからなあ」

彼女と話をしたあとの健三の胸にはいつでもこういう述懐が起った。

その日健三は例のごとく襷をかけて戸棚の中を掻きまわしているこの姉を見いだした。

「まあ珍しくよく来てくれたこと。さあお敷きなさい」

姉は健三に座蒲団を勧めて縁側へ手を洗いに行った。

健三はその留守に座敷のなかを見まわした。欄間には彼が子供の時から見覚えのある古ぼけた額がかかっていた。その落款に書いてある筒井憲という名は、たしか旗本の書家か何かで、大変字が上手なんだと、十五六の昔ここの主人から教えられたことを思い出した。彼はその主人をそのころは兄さん兄さんと呼んで始終遊びに行ったものである。そうして年からいえば叔父甥ほどの相違があるのに、二人してよく座敷の中で相撲をとっては姉から怒られたり、屋根へ登って無花果を拐いで食って、その皮を隣の庭へ投げたため、尻を持ち込まれたりした。

主人が箱入りのコンパスを買ってやると言って彼を騙したなりいつまでたっても買ってくれなかったのを非常に恨めしく思ったこともあった。姉と喧嘩をして、もう向うから謝罪って来ても勘忍してやらないと覚悟をきめたが、いくら待っていても、姉が詫まらないので、仕方なしにこちらからのこの出かけて行ったくせに、手持ち無沙汰なので、向うでおはいりというまで、黙って門口に立っていた滑稽もあった。……

古い額を眺めた健三は、子供の時の自分に明らかな記憶の探照燈を向けた。そうしてそれほど世話になった姉夫婦に、今は大した好意をもつことが出来にくくなった自分を不快に感じた。

「近ごろは身体の具合はどうです。あんまりひどく起ることもありませんか」

彼は自分の前にすわった姉の顔を見ながらこう訊ねた。

「ええ有難う。おかげさまで陽気がいいもんだから、まあどうかこうか家のことだけはやってるんだけれども、——でもやっぱり年が年だからね。とてもむかしのようにがせいに働くことは出来ないのさ。昔健ちゃんの遊びに来てくれた時分にゃ、随分尻っぱしょりで、それこそお釜のお尻まで洗ったもんだが、今じゃとてもそんな元気はありゃしない。だけどおかげさまでこうやって毎日牛乳も飲んでるし……」

健三は些少ながら月々いくらかの小遣いを姉にやることを忘れなかったのである。

「少し痩せたようですね」

「なにこりゃ私の持ち前だから仕方がない。昔から肥ったことのない女なんだから。やっぱり糂が強いもんだからね。糂で肥ることが出来ないんだよ」

姉は肉のない細い腕を捲って健三の前に出して見せた。大きな落ち込んだ彼女の眼の下を薄黒い半円形の暈が、だるそうな皮で物憂げに染めていた。健三は黙ってそのぱさぱさした手の平を見つめた。

「でも健ちゃんは立派になって本当に結構だ。お前さんが外国へ行く時なんか、もう二度と生きて会うことはむずかしかろうと思ってたのに、それでもよくまあ達者で帰って来られたのね。お父さんやおっ母さんが生きておいでだったらさぞお喜びだろう」

姉の眼にはいつか涙が溜まっていた。姉は健三の子供の時分、「今に姉さんにお金が出来たら、健ちゃんに何でも好きなものを買って上げるよ」と口癖のように言っていた。そうかと思うと、「こんな偏屈じゃこの子はとても物にゃならない」とも言った。健三は姉の昔の言葉やら語気やらを思い浮かべて、心の中で苦笑した。

## 五

そんな古い記憶を喚び起こすにつけても、久しく会わなかった姉の老けた様子がひとしお健三の眼についた。

「時に姉さんはいくつでしたかね」

「もうお婆さんさ。取って一だものお前さん」

姉は黄色いまばらな歯を出して笑って見せた。実際五十一とは健三にも意外であった。

「すると私とは一廻り以上違うんだね。私ゃまたせいぜい違って十か十一だと思っていた」

「どうして一廻りどころか。健ちゃんとは十六違うんだよ、姉さんは。良人が羊の三碧で姉さんが四緑なんだから。健ちゃんはたしか七赤だったね」

「何だか知らないが、とにかく三十六ですよ」

「繰って見てごらん、きっと七赤だから」

健三はどうして自分の星を繰るのかそれさえ知らなかった。年齢の話はそれぎりやめてしまった。

「今日はお留守なんですか」と比田のことを訊いて見た。

「昨夕も宿直でね。なに自分の分だけなら月に三度か四度で済むんだけれども、ひとに頼まれるもんだからね。それに一晩でもよけい泊りさえすればやっぱり若干かになるだろう、それでついひとの分まで引き受ける気にもなるのさ。このごろじゃあっちへ寝るのとこっちへ帰るのと、まあ半々ぐらいなものだろう。ことによると、向うへ泊る方がかえって多いかも知れないよ」

健三は黙って障子の傍に据えてある比田の机を眺めた。硯箱や状袋や巻紙がきちりと行儀よく並んでいる傍に、簿記用の帳面が赤い背皮をこちらへ向けて、二三冊立てかけてあった。それから綺麗に光った小さい算盤もその下に置いてあった。

噂によると比田はこのごろ変な女に関係をつけて、それを自分の勤め先のつい近くに囲っているという評判であった。宿直だ宿直だと言ってうちへ帰らないのは、あるいはそのせいじゃなかろうかと健三には思えた。

「比田さんは近ごろどうです。大分年を取ったから元とは違ってまじめになったでしょう」

「なにやっぱり相変らずさ。ありゃ一人で遊ぶために生まれて来た男なんだから仕方がないよ。やれ寄席だ、やれ芝居だ、やれ相撲だって、お金さえありゃ年が年中飛んで歩いてるんだからね。でも奇体なもんで、年のせいだか何だか知らないが、昔に比べると、少しは優しくなったようだよ。もとは健ちゃんも知ってる通りの始末で、随分はげしかったもんだがね。蹴ったり、たたいたり、髪の毛を持って座敷中引っずり廻したり……」

「その代り姉さんも負けてる方じゃなかったんだから



试读结束：需要全本请在线购买： www.erton